

記念論文

近代中国の社会問題に対する政策的考察

— 「ぼん女」¹ の正田淑子と戸田貞三を中心として—

沈 潔²

Policy Considerations on Social Problems in Modern China:
Focusing on Yoshiko Shoda and Teizo Toda in “Japan Women’s University”

SHEN Jie

キーワード：近代中国，正田淑子，戸田貞三，日本女子大学社会事業学部

Key words：Modern China, Yoshiko Shoda, Teizo Toda, Japan Women’s University

要約：本稿の主な趣旨は、日本女子大学社会福祉学科の先輩である正田淑子及び戸田貞三の戦前の中国調査や活動に絞って、彼らとその激動の時代に身を置いて、知識人の立場で中国の社会問題や女子教育をどのように捉えていたのか、また、どのような政策的考察を行ったのか、『家庭週報』を中心とした資料によって、いままであまり解明されていなかった史実を明らかにする。内容構成は、その一に、史料の『家庭週報』の記事に見る同時代の「ぼん女」と中国との往来；その二に、正田淑子及び戸田貞三の中国視察と活動の史実；その三に、正田と戸田が近代中国の社会問題に対する関心と政策提案となっている。

日本女子大学の社会福祉学科は、中国との間に長く、深いつながりを持っていた。戦前に社会福祉学科の大先輩であった著名な学者の生江孝之は、何度も中国を訪ね、中国の社会事業及び麻薬中毒者の救済活動を視察したり、支援者を指導したりしていた。また、学科の前身である社会事業学部長を務めた正田淑子（以下は正田）も、1926年に中国視察団に参加し、初めて中国を訪ね、その後、何度も中国に足を運んだ。さらに、社会事業学部長を辞めることを機に、正田は1937年に「満洲国」（中国の東北地域）民生部の委託を受けて、永住のつもりで中国に赴任し、1942年に心

臓麻痺で異郷において世を去った。そして、日本女子大学の社会事業学部の創設に関わり、創設後に防貧、救貧や社会問題の科目を担当した東京大学の戸田貞三（以下は戸田）もたびたび中国調査に出かけて、その見聞を日本女子大学同窓会の桜楓会が発行した『家庭週報』に寄稿し、「ぼん女」の学生に隣国の最新事情と自分の見解を伝えた。

また、戦前には中国に進出した日本の諸機関に就職したり、夫の仕事関係で中国に滞在したりした社会事業学部の卒業生が数多くいたことも、当時の『家庭週報』の記事から窺える。ほかには、「日満親善」というスローガンの元に「満洲国」

から派遣された留学生がおり、社会事業学部において勉学する者もあった。その時代の流れの中で、「ぼん女」は、日本と中国の社会政策や女子教育の交流に一つの窓口としての役割を果たし、一方、日本政府の植民地拡張・支配政策に積極的に関わっていた事実も明らかであった。

本稿の主な趣旨は、日本女子大学社会福祉学科の先輩である正田淑子及び戸田貞三の活動に絞って、彼らとその激動の時代に身を置いて、知識人の立場で中国の社会問題や女子教育をどのように捉えていたのか、また、どのような政策的考察を行ったのか、『家庭週報』を中心とした資料によって、いままであまり解明されていなかった史実を明らかにする。

一. 『家庭週報』の記事に見る同時代の「ぼん女」と中国との往来

1) 『家庭週報』について

『家庭週報』は1904（明治37）年に創刊された最初の桜楓会機関紙である。1904年に日本女子大学同窓会である桜楓会が設立される際に、機関紙として創刊された『家庭週報』は、B4版8頁の紙面で、当時の定価は1部3銭であった。休刊・再刊・復刊を経ながら、1951（昭和26）年4月15日第1633号まで発行した後、「桜楓新報」

と改題され、現在まで続いている。本紙は、「成瀬仁蔵の女子教育の理念から社会改良に向かう開かれたジャーナル」として同窓会機関紙の枠を超える役割を担い、「生涯教育の実践」を提示する紙面展開を目指した雑誌であった。また、卒業生が編集を担当し、「論説から雑報に至るまで一切女子の手によってなされ」という³。このことは、1904年の当時において、画期的なことであった。当紙は、卒業後の学生らの取材記事や各支部の活動などを随時に報道し、在学期間のみならず、卒業後の学生の人生にも大きな影響を与えたという⁴。

2) 『家庭週報』と「支那（中国）」⁵

『家庭週報』の創刊の時代背景は、主要な資本主義諸国が海外市場の開拓を狙って、植民地を拡張する政策を重視する時期であった。そのような背景のもとで『家庭週報』も創刊以来、中国関連の記事などを積極的に取り上げ、「海外」「アジア」への視線を強めた。「支那（中国）」、「上海」、「満洲・満洲国」などのキーワードで『家庭週報』記事の目次を調べると、実に数多くの記事がピックアップされる。例えば、「支那」をキーワードとして『家庭週報』を検索すれば、下記のような数々の記事が出てくる。（表1を参照）

表1 『家庭週報』に掲載された中国に関連する一部の記事（1919年代～1930年代まで）

年 月	キーワード 支那（タイトル後ろの番号は、号数）
1913 9	支那の富力（高橋秀臣調査）238号
1913 9	歴史上より見たる支那時局の観察（岡部精一）239～241号
1915 10	支那人の実力（村井保固談）337号
1916 3	ローマ字欄 漢文国の本場、支那に於ける文字改良の運動（嵯峨野星二）356号
1916 6	支那の兌換停止問題（一記者）370号
1917 9	支那四川省、欧州連合 435号
1921 5	季節英さんの尽力で支那料理の実習 615号
1921 8	支那料理 625号

1921 9	支那全国に盛なる婦人参政の叫び 629 号
1922 1	最近支那国勢の推移婦人平和協会に於いて (井上雅二) 644 号 /646 号
1923 1	我が教育に対する支那学生の印象 694 号
1924 10	刻下の支那の動乱について (米田実) 765 号, 767 号, 769 号
1925 12	支那の関税会議と今回の動乱に就て (米田実) 821 号 /822 号
1925 2	女学生の支那視察旅行 780 号
1925 6	大正の婦人遣唐使, 今春の女子専門学校生の支那視察団 (下田次郎談)
1925 7	上海事件の真相 (米田実) 801 号 * 支那の国権回復要求 804 号
1926 10	支那見学のノートから (正田淑子) 860 号 /861 号 / 867 号
1927 1	生に徹底せる生活者支那人 (江藤代議士談, 文責) 872 号
1927 1	南支那事情の断片 (斉藤談, 文責) 872 号
1927 11	支那革命運動の近状 (大西齋) 911 号
1927 11	初冬の支那料理六種 (師範家政学部四年栄養係) 913 号
1927 3	支那旅行談 (竹中繁子談, 文責) 881 号 /883 号 /884 号
1927 6	欧米に於ける支那学研究的近状 (宇野哲人談) 894~896 号
1927 6	支那時局について (大西齋談) 894~896 号
1927 6	支那時局を廻る五巨頭 (国際問題研究会) 894 号
1927 7	支那問題開設 (米田実談) 896~898 号
1928 9	隣国支那とくる 954~958 号
1929 4	支那西北部の水災を救え (婦人平和協会) 978*986 号
1929 5	支那の飢饉, 救済金 984 号
1930 2	厳寒に苦しむ支那被災民 1017 号
1930 2	支那人を解剖す (宮崎議平談, 文責) 1115/1116 号
1930 6	簡単な家庭的支那料理 (大岡篤枝) 1036~1044 号
1932 2	支那人を解剖す (宮崎議平談, 文責) 1115/1116 号
1932 8	支那 (北京) 料理 1139/1142 号
1937 10	支那事変とニュース映画の凱旋 (大内秀邦) 1367 号
1937 10	支那事変と海軍戦況について, 松中中佐に聴く 1367 号
1938 1	支那婦人を認識せよ (清水勝子) 1379 号

出典：桜楓会『家庭週報』1904年～1945年記事より 資料提供：日本女子大学図書館矢吹さより氏

日露戦争 (1904)、第一次世界大戦 (1914) などを経て、日本における中国論は、複雑な様相を呈した。とくに満洲事変 (1931) 以後、中国に関する学術的な研究は前近代中国を中心とする一方、同時代の中国に対して、戦争需要を満たすための満鉄や興亜院などによる現地調査が盛んとなった。多くの知識人が種々の現地調査に参加

し、大量の調査成果を得た。これらの成果によって、近代日本における中国事情の普及が進んだといえる。しかし、それらの調査は中国人との相互理解を深めるために行われたことではない。そのため、大量な調査データによって作り上げられた中国の現状が日本国民の中国理解を促進したともいえない⁶。

『家庭週報』も時代の流れと社会の関心事に追随する一面が見られる。

二. 正田淑子及び戸田貞三の中国訪問

1) 正田淑子の生い立ち⁷



正田淑子先生

正田は、1877年1月（明治10）に栃木県佐野町（現・佐野市）に生まれ、1901年（明治34年）25歳の時、成瀬仁蔵によって創設された日本女子大学（現在の日本女子大学）に憧れ、第1回

生として入学した。英文学科に入った正田は、最後に卒業できたわずか6人の中の一人だった。正田は、1904年（明治37年）に卒業すると同時に桜楓会に入り教育部主任として活躍しながら、英文学部、教育学部学生指導の任に当たり、また敷島寮監を兼ねた。1910年にアメリカに留学し、タイピストとして働きながらコロンビア大学に通った。1923年（大正12年）同大学大学院を修了した後、アメリカで働く予定だったが、同級生の井上秀子学長の説得で母校に戻って、社会事業学部の創設に携わり、学部開設の五年後、社会事業学部長となった。この経緯について、井上秀子が「私が再度、渡米の時、紐育で正田さんにお目にかかりました。私は正田さんにどうしても日本へお帰りなさい、そして日本のため、母校のためお尽くしにならなければなりませんと一晩かけて、説きましたが、その時の私の言葉は、正田さんの心を少しでも動かし得たのではなかったかと思っています。その翌年帰るといふ手紙をいただくことができました」と紹介され⁸、社会福祉学科の元主任の菅支那も、「正田淑子先生がアメリカで社会事業を勉強され、それを母校でそのまま教えられたことであろうことは、容易に想像できる」⁹と、正田氏の帰国動機は恐らく母校と祖

国への還元にあるのではないかと回顧した。

社会事業学部長を務める時期に、正田は自ら実習科目を担当し、学生は「実習や見学によって得る体験は、教室での講義や学生生活の中で抱いた思想を、胸底からゆすぶるものであった。社会事業学部長の正田淑子先生も自ら見学を担当された」と記している¹⁰。正田は、女性の解放運動に情熱をもってその精力を注いだ。1928年（昭和3年）にハワイで行われた汎太平洋婦人会議に出席した正田は、全国投票の公選で11万票を獲得し、トップで代表に選ばれていたことは朝日新聞や読売新聞などに大きく取り上げられた¹¹。『家庭週報』もその参加の過程を連載し、詳しく紹介した。婦人の代表を全国から選ぶわけなので、当時の婦選獲得同盟の市川房枝、日本女子大学の学長の井上秀子などの女性リーダーもその大会に参加した。

1933年4月、社会事業学部が家政学部三類に統合された時に、正田が辞職することになった。辞職理由に関して諸説があったが、『朝日新聞』は「正田女史勇退」というタイトルの記事に、「日本女子大学の正田淑子女史は後進に途を開くため二十年余りの母校の教壇から去ることになった。正田女史が、大正十三年以来、苦心努力を傾注した日本女子大学社会事業学部がこの四月の新学期から経費の関係で解消。家政学部第三類の制度に縮小したのを機会に勇退した」と、述べている。しかし、井上秀子学長は、正田の送別会の場で正田が辞任する理由について、「社会事業学部が家政学部第三類になったため正田さんがよんどころなく辞められたといふやうに申されますのは、まちがひであります」¹²と言った。定かではないかも知れないが、筆者が日本女子大学に留学中、先輩の先生から聞いたことによれば、社会事業学部は、労働運動や社会主義的な傾向に傾斜する恐れがあると疑われて、社会事業学部を家政第三類に変更したという。正田の辞任はそれに関連しているのではないかと、思われる。

正田の主な研究業績は、訳書の『英国婦人消費組合運動』（1932年、カソリン・ウエップ著（B.ウエップ）正田淑子訳）などがある。これは初めて西洋の婦人消費組合運動を日本に紹介した書物と言われて、今も高く評価されている。訳書の訳者序文において、正田は「然るには英国において婦人が早くより消費組合に対する消費者としての彼等の重要性を覚悟し、消費組合機関を最も有効に利用して経済組織の欠陥を改善し、同時に消費組合の機関の下に婦人の一致団結を計り、衣食住は勿論、其の人類の福祉に関する凡ての問題を取り扱ひ、夫に由って婦人の真の開放を計らんとしたのである」、「今後我国婦人は男子の消費組合の一部としての存在に満足せず、もう一歩進んで彼の英国婦人消費組合運動の初期において英国婦人の抱いた堅い信仰を以て婦人独特の消費組合主義の普及に努力せられんことを切望する。特に本書を紹介するのであるが、消費組合研究のために本書が聊かなりとも資する處あらば幸である」¹³と記している。訳書とは言え、正田の学問的立脚点と女性問題・家庭問題を国際的視点から観察する原点を窺える。訳書の内容は表2の通りである。

表2 『英国婦人消費組合運動』目次

第一章 英国婦人消費組合運動の起源 / 1
第二章 原理と組織 / 29
第三章 教育 / 52
第四章 門戸開放 / 78
第五章 消費組合活動 / 93
第六章 貧しき隣人間に於ける消費組合 / 107
第七章 市民運動 / 119
第八章 労働問題に対する興味 / 133
第九章 最低賃銀運動 / 149
第十章 母性の國家的保護 / 163
第十一章 大戦中及び戦後 / 179
第十二章 財政と祝日 / 195

第十三章 自治制の支持 / 208
第十四章 婦人ギルド室に於ける政策 / 220
第十五章 国際的消費組合 / 230
第十六章 記録 / 246
第十七章 恢復基金 / 255
第十八章 最近の概況 / 260

出典：カソリン・ウエップ著、正田淑子訳『英国婦人消費組合運動』、同人社、1932年。

1937年（昭和12年）、正田は「満洲国」道徳会の顧問として満洲に渡って、社会教化事業に携わり、日本植民地「教化政策」の普及のため、66歳で逝去されるまで、現地の多くの村々を歩き回ったという。

正田は終生独身だった。彼女の遺骨が1942年2月に日本に運ばれた時、大勢の日本女子大学の関係者や教え子らが同月15日に小石川雲照寺で行われた葬儀に参列した。

2) 正田淑子と中国の旅

(1) 初めての中国の旅（1926年8月3日～8日）
『家庭週報』では、1926年に発刊された860号、861号、867号において、正田にインタビューした「支那見学のノートから」、「支那旅行の印象」と題した連載を掲載した。その時の見学に関して、正田は「私が今夏の支那視察団に加えて行く、出発となりましたのは、大変急な話しでしたので、ほとんどその視察準備といふやうなことをする暇もなく、そのまま支那を見て参った」、「それに一行は、教育視察の立場だといふので、見聞するものも大方その立場を中心とした」¹⁴。その時期に正田はすでに社会事業学部の教壇に立っていたことから、教員の立場で参加したと思われる。視察団の主催者及び参加メンバーなどについて詳細は不明だが、記事に掲載された視察団メンバーの集合写真からみると、参加者は10名でそのうちの8名が女性であった。視察団の一行は中国の代表的な女子教育機関に訪問し、いたるところで

中国に在住している桜楓会の卒業生と懇談を行った。スケジュールからみれば、女子教育、または桜楓会の交流事業に絡む行事として行われた可能性が高いと思われる。

この視察見学は、1926年（大正15年）7月30日の朝に東京を立って、8月29日に東京に戻り、ちょうど一ヶ月の旅であった。訪問先は東南沿海地域の上海から杭州、蘇州、南京へ移動し、そして船で揚子江をさかのぼり、漢口、武昌、漢陽を

訪ね、それから北方に向かって、北京、天津、最後に日本の植民地だった満洲地域へという東から西へ、南から北への大旅行の行程であった。これらはすべて当時中国の代表的な近代都市であり、時代の鼓動をもっとも身近に捉える町々であった。（表3）これらの都市で視察団は、女子教育施設、一般教育施設、社会事業施設をメインにまわり、その合間に観光名所を訪問した。

表3 視察団の中国見学プログラム 1926年7月30日～8月27日

期間	場所	見学内容
大正15年 7月30日	東京出発	
8月2日 3～5日	上海到着、 見学	領事館、マーケット、外国人共同墓地及び電気埋葬場、ジャスフィールド公園、佛国人の天文台、同文書院、新公園、小学校、女学校、城内、湖心亭
8月6日	杭州、蘇州	杭州：雲林寺大仏、兵王廟、五百羅漢、石佛肖像、西湖、舟遊、西湖蘇東波、革命者の記念碑、紫雲堂、三潭印月の石灯籠。 蘇州：雲山寺、孔子廟、虎丘の盧塔、笛園
8月7日 8月8～10日	南京	城内、清源寺、明孝陵、鷄鳴寺、莫愁湖、蓮池、城壁、秦淮舟遊 日清汽船瑞陽丸にて揚子江を遡る
8月11日	漢口	私立江漢高等中学校、同文書院
8月12日 15日～18日	武昌、 北京	武昌湖北省女子師範学校、国立師範武昌学校、啞学校、天主教の孤児院及び病院 天文祥、ラマ塔、宮殿、ラマ宮、孔子廟、雍和宮、紫寶城、国子監、北海、文華殿博物陳列所、武英殿、市内、京師図書館、清華大学校、万寿山、ロックフェロー病院、宣統帝宮殿、女子北京師範学校、天壇
8月19日 8月22～23日	天津 奉天	市内、刑務所；奉天へ向ふ車中、万里の長城 奉天女子師範中学校、北陵同善堂、孤児院
8月24日	旅順	古戦場、
8月25日	大連	満鉄、市内、高等女学校、理化学研究所、
8月27日	京城	朝鮮神社、物産陳列所、幼稚園、

出所：桜楓会『家庭週報』860号1926年10月8日

翌年の1927年6月10日に、正田は帝国通信社が主宰するラジオ「婦人講座」に「日支親善と我等の責任」¹⁵と題した講義を行い、視察の見聞と感想を披露した。

(2) 第2回の中国の旅（満洲女子教育視察）

第2回目の中国の旅は、満洲女子教育視察を目

的として1932年（昭和7年）11月頃に行われた。社会事業学部長を務めていた正田及び日華学会服務部の舛子等の一行が、東京を出発してからの視察日程に関する記事は、11月11日の『家庭週報』に掲載された。同じ紙面に「婦人国際連盟ーリットン報告¹⁶に対する一つの観方ー」との論説も併せて掲載されているが、これは、正田らの「満

図 1 社会事業学部第 1 回生と正田先生



社会事業学部第一回生の写真。真ん中に洋服を着ているのは正田先生。

出典：日本女子大学社会福祉学科提供

洲国」の旅の背景や趣旨などに関する背景説明のため、資料として並べたと考えられる。

① 視察のパイプ役の日華学会服務部について

この視察のパイプ役を果たした日華学会服務部は、どのような組織だったのか、先行研究を踏まえ、簡単にまとめておく。

日華学会は主に中国、東南アジア出身の留学生の教育や支援を行う団体として、戦前期に設立された。設立の経緯をみると、1911年の中国辛亥革命勃発時に、留学生の仕送り金などが途絶し、困窮していた留学生の経済援助をおこなうため、財界人や教育関係者が「支那留学生同情会」を組織した。1918年5月には渋沢栄一・内藤久寛などの財界人が一部官僚と提携して「同情会」を土台に日華学会を設立した。元々1914-18年の第一次世界大戦の間、欧州列強がアジアを振り返って見る暇がなかったとき、日本政府が北洋軍閥を中心とする中国政府に「21ヶ条要求」(1915年)「日中共同防敵軍事協定」(1918年3月)などを次々と押しつけて、中国側の日本批判が高まりつつあったことがその背景にあった。日華学会は日本

留学への支援と日本語教育の提供などを通して、「日華両国共同の福利を増進し、輔車相依るの一助」¹⁷とし、日本への反発を緩和することを狙っていた。

1931年には満洲事変、また1937年からの日中全面戦争の開始などがあったが、1930年代の中国籍(中国本土)の留学生数の推移をみると、1930年度に3064名で、1932年度には1110名と激減している。そのほかに「満洲国」出身者が311名であった。その後、学生数は漸次戻り、1936年度には4104名に回復したほか、「満洲国」出身者が急増して1805名となった。日中戦争勃発後の1938年度には、中国籍の留学生は1508名に減少し、一方、「満洲国」出身者は1624名だった¹⁸。1930年代の留学生支援は、「満洲国」留学生のニーズへの対応が高かった。

正田の満洲女子教育視察は、こうした時代の変化に必ず旅でもあった。

② 視察の日程

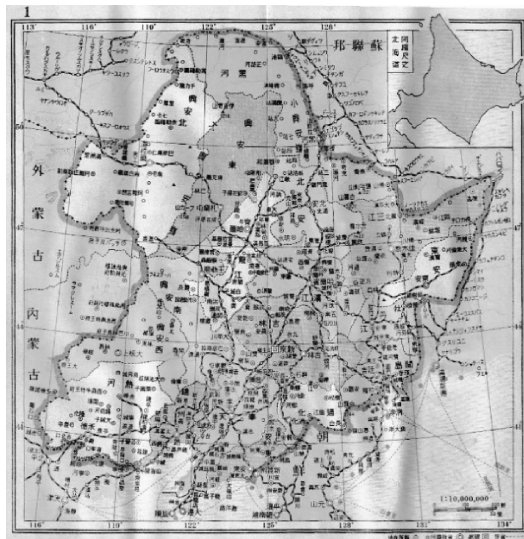
1932年11月11日の『家庭週報』に「母校社会事業学部長正田淑子氏は、「満洲国」女子教育

図2 正田淑子満洲国女子教育視察日程 1932年11月11日~12月28日

視察日程	
<p>別項記載の如く母校社会事業學部々長正田淑子氏日華學會服部外子氏は満洲国女子教育視察として十一日東京を出發されました。日程左の如し。</p> <p>月 日 驛名及發着時間</p>	<p>滿洲國女子教育</p>
<p>十一月十一日 東京發 午後</p> <p>十三日 釜山着 午前</p> <p>十四日 安東着 午前</p> <p>十五日 奉天滞在</p> <p>十七日 遼陽</p> <p>十八日 新民屯</p> <p>十九日 鐵嶺</p> <p>二十日 奉天發 午後</p> <p>廿一日 四平街着 午後(二泊)</p> <p>廿二日 四平街發 午後</p> <p>廿三日 新京滞在</p> <p>廿五日 新京發 午前</p> <p>廿六日 吉林着 (二泊)</p> <p>廿七日 吉林發 午後</p> <p>廿八日 敦化滞在 (二泊)</p> <p>廿九日 敦化發 午前</p> <p>三十日 新京着 午後</p> <p>十二月一日 哈爾濱着 午後</p>	<p>五日 哈爾濱發 午前</p> <p>六日 昂々溪着 午後</p> <p>七・八日 齊々哈爾濱滞在 (二泊)</p> <p>九日 昂々溪發 午後</p> <p>十日 滿洲里着 午後</p> <p>十二日 滿洲里發 午前</p> <p>十三日 昂々溪着 午前</p> <p>十四日 龍江發 午前</p> <p>十五日 浪南着 午前</p> <p>十六日 鄭家屯着 午後</p> <p>十七日 通遼滞在</p> <p>十八日 通遼發 午前</p> <p>十九日 打虎山着 午後</p> <p>二十日 錦縣着 午前</p> <p>廿一日 錦縣發 午後</p> <p>廿二日 奉天着 午後</p> <p>廿三日 奉天發 午後</p> <p>廿四日 營口着 午後</p> <p>廿五日 營口發 午後</p> <p>廿六日 大石橋發 午後</p> <p>廿七日 大連着 午後</p> <p>廿八日 大連發 午前(船中)</p> <p>廿九日 神戶着 午前</p> <p>三十日 東京着 午後</p>

出典：桜楓会『家庭週報』昭和7年11月11日4面

図3 満洲国全図



出典：東京地形社『コンサイス 満洲国地図』昭和十五年四月

視察として11日東京を出發された」という記事があり、図2のような視察日程も掲載された。

「満洲国」が建国から間もないこの時期の視察旅行の訪問先を見ると、新京（長春）、奉天（瀋

陽)、哈爾濱、大連などの大都会や交通要所の都市だけではなく、新民屯、昂昂溪、洮南、鄭家屯、打虎山、大石橋など中小都市や僻地の町なども含まれており、前回の中国訪問より辺鄙な地域の貧民に触れる機会も増えたと考えられる。ただし、この折の満洲訪問の結果は、『家庭週報』にその紹介資料はなかった。

3) 「満洲国」へ赴く

1937年春ごろ、「満洲国」民生部の招聘で正田は「満洲国」道德会の顧問に赴任した。正田の満洲国への旅と生活については、当時の朝日新聞や読売新聞に度々次のように大きく取り上げ、宣伝された。

「五族協和の精神を求めて昭和十二年春、友邦「満洲国」に赴き、“満洲国”道德会”唯一の日本女性役員として活躍。三十万の満人会員から“満洲の母”と慕はれている。元日本女子大学教授正田淑子女史は一旦帰京、身の回り整理して、六十四歳の余生を楽土「満洲国」の理想に捧げるため、近く再び同地に向かうことになりました」¹⁹。「教鞭を執り我が国の運動の第一線に立つ婦人社会学者として知られているが、二年前その後半生を友邦「満洲国」の教化事業に捧げるべく、渡満以来馮前司法大臣を総裁として創立された道德会唯一の女性役員として活躍」²⁰と、紹介されていた。新聞記者のインタビューに対して、彼女は「満洲国国民精神の基礎をなすものは儒教思想です。これの健全な普及、向上の中から真の日滿提携が生まれてくると信じます。」「また、これを強化するために名を知らぬ奥地に吹雪の中を教化講演に出かけたこと再三ならずありました。苦しいことや心細かったことなど随分ありましたが、その努力の甲斐あって今では分会の数も五百幾つに増えました」と語った²¹。

また、1939年3月11日に再び満洲に戻る予定の正田に対して、東京婦人聯合会が激励会を開い

た。その様子について、「送別会は一〇日五時半から丸之内東京会館で婦人聯合会主催の下で開かれた。この夜、吉岡弥生、大妻コタカ、守屋東、上中八重野女史及びお弟子さんたちに囲まれてにぎやか」だったと²²、報道された。東京に戻って1ヵ月あまり経ったあと、正田は満洲への永住を決意し再び満洲へ出発した。当時の朝日新聞には、「満洲国委託として友邦の教化事業に老躯を捧げ、去月十二日帰京した“満人の母”正田淑子女史(63歳)はいよいよ満洲へ永住すべく、十七日午後三時東京驛発“富士”で、多数の見送りをうけて渡満した。」²³と、大きく取り上げられた。

1940年7月頃、再び一時東京に戻った「満洲国道德会理事」としての正田は、朝日新聞の取材に応じ、「渡満以来三年の心魂を打ち込んだ「満洲国」道德総会——「満洲国」婦人を中心とした生活刷新団体の近状」について、次のように語った。「満洲国では通常『道德会』で通る道德総会は同国の婦人達を動員して生活を刷新し満洲国将来の発展を図るのが目的で既に会員二十二万人、分会六百余を数へ今年からは協和会の一翼となって活躍を強化した。新京の本部では指導者を養成する『高級学習班』や一般会員に新しい生活法を教える『民衆講習社』などの教育機関を設けて優れた指導者を全国に送り出して、一般婦人たちの向上に努める」。一方、「正田女史は満洲国人の本部員と映写機を携へて各分会を巡回し講演会を催す。この巡回講演会は何より喜ばれて「満洲国」の婦人達は貪るやうに新しい知識を求めてみると云ふ」。そして、取材の最後に正田は「満洲国の婦人達は生活の刷新に涙ぐましい努力を重ねてみます。そして、数ならぬ私の意見をよく聞いて呉れます。「満洲国」の方々は、国の経済は台所からと主婦の責任を深く認識してゐるのです。水色の仕事着で家庭で街頭で立働くその姿は今の日本の婦人達にお目にかけてい程です」と語って、「満

洲国道德会」の活動と自分の果たした役割を大きく宣伝した²⁴。

この記事から分かったことは、正田の満洲行き今回の仕事は、主に現地で生活している中国人女性を対象とした社会教化事業のためであった。彼女はこの時期に中国女性に対する見方が1926年に初めて中国を旅した時の目線とはかなり変わった。即ち、1920年代の中国視察は、アメリカから戻って間もない時でもあり、彼女には欧米の価値観や目線で中国を見て評価した雰囲気を感じられる。しかし、今回は植民地満洲に立脚した社会組織の一員として現地に赴くことになり、明確な任務とそれに伴う責任感を担わなければならない心境に切り替えていたのである。

正田は顧問を務めた「満洲国」道德会とはどんな組織であろうか、中国語の資料に基づいて簡単に説明すれば、「満洲国」道德会は1933年に中華民国道德会から離脱し、独立させた「満洲国」の教化団体である。会員の中に女性が多いのが特徴で、「家庭が守られれば、国は栄える」という内容が会の主な趣旨である。1941年に公布された「満洲国建国宣言」に掲げた日本人・漢人・朝鮮人・満洲人（現地の中国人）・蒙古人による「五族協和」と「王道楽土」の理念を推進するために、道德会は「女性学習班」を560回開設し、訓練を受けた者は3400人余りに達した。同時に女子識字班、女性講習班、義務女学等も開設され、「女児道德」「お嫁道德」「老婆道德」を教授し、植民地「満洲国」の支配へ帰順させようとした。また、「名流夫人公演団」を設立し、各地を巡って直接の教授に努めた²⁵。そのほか、同会は女性職業訓練、保母養成講習班をも創設し、無料で働く場を紹介し、多くの中下層女性の参加を実現した。その養成班は東北各地に広げて8600箇所を達し、会員は57920人を有したという²⁶。

正田の今回の満洲行きは、生活環境の大移動だけでなく、これまでの「研究」を中心とする「学

者生活」から実践の場で活動する社会活動家への生活スタイルの大転換をも意味していた。

3) 戸田貞三と社会事業学部

戸田貞三（1887年3月6日 - 1955年7月31日・以下戸田）は、家族研究のなかで「世帯」の概念を本格的に導入した社会学者として有名である。戸田の経歴では、1912年東京帝国大学文科大学哲学科（社会学



専修)を卒業し、1917年東京帝国大学文科大学助手、1919年大原社会問題研究所所員、1920年東京大学文学部講師、アメリカおよび欧州へ留学、1922年帰国、東京大学助教授として第一講座を担当する。1929年東京帝国大学教授、1944年東京帝国大学文学部長、1947年退職となる。

日本女子大学が社会事業学部創設した際、麻生学長は広く意見を聞き、最終的に決断するまで生江孝之、山室軍平、留岡幸助等社会事業関係の指導者の意見を伺い、また、新進の社会政策学者であった永井享、気鋭の社会学者戸田貞三、綿貫哲雄らにも相談したと、資料に記録されている。その中で最も議論的となったのは、「社会学部」にするか、「社会事業学部」にするかということであり、最終的には麻生学長の決意で「社会事業学部」と決めたという²⁷。おそらく東京大学に入ったばかりの戸田は、社会事業学部の創設に関わったと思われる。

以上のような経緯もあって、社会事業学部の開設後、戸田は非常勤として「防貧救貧事業」科目を担当していた。本学部の卒業生らの回顧録によると、戸田先生は救防貧問題を論じたとき、「貧困について、それがたとえ1%であって当事者にとっては1% = 100%であることをすべての社会悪を考える時決して忘れるな」と熱論して、学生

に「強烈な印象として残った」と伝えられている²⁸。

中国事情について、戸田も多大な関心を持ち、1932年11月に東京帝大に創られた国粋主義系の学生研究団体の「帝大満蒙研究会」の責任者を務めていたこともあり、『家庭週報』に掲載されたインタビューの中に、彼は主に家庭と家族事情を中心とする視点で1932年6月に中国を訪問し、中国社会に関する観察を披露した。

三. 近代中国の社会問題に対する関心と政策提案

正田と戸田は中国現地視察を終える度に、いずれも『家庭週報』からのインタビューを受け、中国での見聞を披露すると共に、自分なりの感想を加え、一部の問題に対して改善策や政策提案を行った。いずれも連載の形で掲載されたインタビューの内容は豊富で視野も多方面におよんでいた。中国の社会問題に関する正田と戸田の関心と指摘は主に以下の数点にまとめられる。

1) 中国の家庭事情

中国現地の家庭事情と家庭生活について、戸田は奉天（現在は瀋陽）での滞在中、宿泊場所を大和ホテルから中国人街に近い「中国人の宿屋」に移して、苦労しながら調査を行った。その目線はまだ一部の「上流家庭」だけに限られたが、少なくとも幾つかの問題発見ができた。

その一つは、生活習慣の不摂生および不合理である。「概して北支那一带の人間は朝寝坊である、出勤は十時の定りだが凡そ十一時頃に出掛ける。少し金があつたり身分がよかつたりすれば商人役人の別なく十一時頃でなくては起きない」、「八時頃夕食（支那は二食主義）が終わる——そしてこの頃から彼らの本当の世界が来るのだといふ。友達が来たり自分が出掛けたりして三時頃までも麻雀、トランプをやり、阿片を喫ふ」²⁹。当時「満洲地方」の最高支配者である張学良の場合、「常に起床午後一時、出勤三、四時頃。そしてあとは

遊んで暮らすのである」という³⁰。

その二は、家族関係の歪みである。夜の生活を中心とする家庭では、子供たちは「学校があるから朝は七、八時頃に起き、ひとり食事をして学校へゆく、夕飯は五時か六時に喰べる。こんな風で親と子とは最初から生活は別である。夜も子供は早く寝てしまふ、そのあとで親達は夜明け近く迄も遊び耽けるのである」。またこの時代、高官や金持ちの家庭では「一家庭には少くとも三人ぐらゐの夫人がゐる」、「例へば今主人は第何夫人の部屋にゐる、と云ふ如くに、云はゞ情痴の世界の争ひが露骨になる。勢ひ彼女らは互いに探り合ひをやり、各自の子供を間牒〔課〕に使ふ。そこで子供達は変に歪められた気質になり、子供達には見せたくない世界をふんだんに見せつけられて育つ」のである³¹。これらの面から見ると、当時の中国の多くの「上流社会」の家庭生活は、「文明化」「近代化」どころか、封建主義社会の「家庭」の理想像にもかけ離れている。儒家は「修身齊家平天下」を「読書人」の天職と見なしてきたが、戸田は自ら見聞した中国人上流社会の家庭生活と照らしてみると、それは「齊家は全然行はれてゐない」、「到底平天下は実現されぬと思」い、「満洲国の要人」に生活習慣の改善などを提案したが、「そんな事は始めて聞いた、さう云はれ、ばさうだ」などと婉曲的にかわされたという³²。

一般民衆の労働状況については、正田も戸田も「苦力」を中心とした観察を行った。

2) 労働者の生活環境などについての日中比較

正田は東京に戻った後も、中国といえば思い出すことは、やはり「苦力」たち即ち中国人労働者のことである。正田にとってもっとも印象深いのは中国人の人力車夫たちである。「衣、食、住、総てを最低限に軽減して人力車のかじ棒を高くあげて走つて居る苦力の哀れさを思出したのです。乞食といふ名称をつけられないだけ彼らはそれで

も働くといふ事」,「彼らの働きはたゞ生きて行くに必要な食を得て行けるといふだけでそれも毎日得られない場合があるさうです」³³。正田は中国の苦力を日本の「自由労働者」と比べ,「自由労働者と日本で申して居りますが働きのある時とない時とは彼らの一日の食に関しては非常に大きい波動を与へるのですが『三日すれば忘れられぬ』といふのは日本の乞食のみのいふ言葉ではなくて支那のごつた返す様な街をよれ—の着物をまとひ車を引き苦力の口から実際に出る言葉なのでした」と正直な感想を漏らし,中国人の肉体労働者の労働環境と生活環境は日本の「自由労働者」よりも厳しく,劣悪だったことを強調した³⁴。

また,正田は上海において,意図して「貧民窟」の見学に出かけ,「支那の貧民窟は言葉通りの貧民で,アンペラといふ芦蓆と竹の棒で蒲鉾小屋を作つて,是で雨露を凌ぎます。又夏期は路傍に横臥し,冬期は人家の軒下に寒さを凌ぐ者が多く,苦力などは夏は齒代(人力車などの借り賃—引用者)を払つて借りた人力車を寝台にして夏を過ごすのださう」などの実情を見聞した³⁵。彼女はまたこれを日本の状況と比較し,「東京の日暮里,三河島の貧民地区以上で,とても比較にはなりません。日本の貧民は,隧道長屋,棟割り長屋に住んで居て,或る者は貧民としては身分以上の収入のある者もあります」と,「貧民」に関する日中間の「差」の大きさを指摘した³⁶。また,短い視察にもかかわらず正田は「貧民」という下層民衆の中の「中間層」に関する観察結果を披露した。すなわち,「支那の貧民の重なる者は,自由労働者と人力車夫で,此の階級が乞食と普通人の区画線になつて居る為に此の階級が,一朝失業する場合は人生のどん底生活をする乞食になるのです」³⁷。これも日本社会ではなかなか見られない現象と考えたのか,正田の「其の為か支那には乞食が中々多いのには驚きました」との感想は理解できないものでもない³⁸。

戸田は日本の植民地だった大連で荷物の運搬を担当する「苦力」たちの生活状況を複数の角度から観察した。まず賃金と労働時間・労働強度の面では「大連の埠頭には約二万人の苦力が働き,彼らは日本貨の四十五銭から六十銭の支給を受けて朝七時から午後六時迄の十時間労働(昼休み一時間)に甘んじてゐる」,「彼らの常食は高粱で作つたパン,又は粟のパンで,稍々上等なものになると少量の小麦が加へられてゐる。これらの価は日本貨の二銭位で,普通之を二つと生ねぎ一本を嚙ぢれば満腹もする」,「彼等苦力は異常な健康の持ち主で豆粕板四枚宛ぐらゐは(一枚十二貫あるから都合四十八貫)平気で運搬する,しかもこの激労働を十時間も続け,十二,三銭の食費で聊かも健康を害する事が無い」という³⁹。また,「大連には多数の油房がある,そこでは大豆を絞つて粕と油とを取る作業をするのであるが,行つて見ると,支那人は身に一条をも纏はず高温度の中で真黒になつて働いてゐる」⁴⁰。つまり,中国人の「苦力」労働者はその名前の通り「苦しい力仕事を強要された労働者」だったのである。

大連で,戸田は中国人の労働者は賃金が低だけでなく,中国人「頭(中国語では「工頭」)」と宿舍提供者による数十人の搾取を受けている事実に気づいた。「彼等(大連埠頭の中国人—引用者)のうち約一万人以上は寄宿舎に収容されてゐる。寄宿舎は福昌華工株式会社と云つて所謂株式会社組織となつてをり,一種の営利事業を行つてゐる」,「満鉄本社から支払はれる賃銀は株式会社に頭をはねられた上で苦力の手に渡る」⁴¹。社会学研究者としての立場からのこれらの観察は,中国人労働者に対する理解を深めるには意義のあることと言えよう。

3) 女性の社会的地位

中国の家庭生活を観察した戸田は,家庭の中の女性達の地位を重んじ,「家庭を作る事は即ち人

間を仕立てる事に依つて治国平天下は実現する。而してこの基を為す夫人に対しては先づ教育を施さねばならぬ」と家庭生活を破壊状態から救うには、教育を通して女性たちの自覚と自己努力の必要性を強調した⁴²。

中国で「字が読める」女性が非常に少なく、「偶々有識婦人に会つてみると、今度は反対に実に驚くべき女が出来上がつてゐる」という社会状況を鑑み、戸田は「今の支那の場合何処の教育を真似るより日本の教育を取入れる事が必要と思ふ。勿論日本がそのまゝ理想的だとは云はぬが——日本の男子教育は100%の失敗と思ふが女子教育だけは日本のものが世界に秀れてゐると私は信ずるから」と日本の女子教育システムが中国の女子教育の近代化にそれなりの手本を示すことが可能だと思つたのである⁴³。

中国の女性たちの社会的地位、社会的行動そして、社会を動かす組織活動などについて、中国の女性たちの努力は言うまでもなく重要であるが、日本の女性たちも傍らから助力することが可能であると正田は考えていた。「支那に長い間ゐた人の話を聞きますのに、支那には中心になつてまとめる力がないといふことであります。統一がない、これは、日本の婦人間にも幾分何かを暗示する言葉ではないかと思ひます」⁴⁴。つまり、日本側が女性組織としての手本を示し、その上組織の力を持って、積極的に隣国中国の女性を助け、社会的地位をともに向上させようとする提案である。「私共の桜楓会にしましても、これが唯単独に清く存立してゐるといふだけでは足りないと思ひます。所謂世俗の中へも、汚い弱い社会にも入つて行つて、そのあるが儘の社会に於て助け導いて行くといふ態度が必要だと思ひます」⁴⁵。団体の機関紙での発言なのでメンバーへの呼びかけであるとは言え、当時の日本人女性と女性運動に対して打ち出した正田のメッセージとも理解できよう。

4) 国民性の比較について

日本では、1894-95年の日清戦争前後を境に、漢字文化圏の中心だった「中国」に対するイメージが、「尊敬」「崇拜」から「蔑視」へと急変し、「文明国」としての目線から時代遅れの「老大帝国」として中国を眺め始めた。「支那の国民性」に関する著述は一時社会的ブームになり、「支那人が狡い、利己心一点張りだといふ非難」は日本女子大学の先生たちの耳にも入っていた⁴⁶。「これが不思議で、いろいろ考へて見ました」結果、正田は「支那人には道德概念がほとんどありません」「国民性は確かに悪い」という印象を自分でもある程度感じたが、「悪い印象を受ける人は支那人のごく低い階級の人からその材料を得て判断する欠点があり」、つまり不完全な表面的印象といわざるを得ない観察結論であると指摘した⁴⁷。正田は中国の各地を観察し、地域的組織、業界組織、家族組織などの面において、独自の歴史的積み重ねと特徴があり、「競走(争)」と「妥協・調和」もあり、「妥協してお互い、工合いに調和さへして行けば、国民性の芽生えはこんなところから生じるのである」と述べ、国民性の形成は中国では確かに遅れていたが、近代国民国家形成段階中の国民性養成の問題として考えれば、それほど難解な問題ではないと考えていた。また、「利己心」が強いとか、「国民の間には、国家に対する義務、忠君愛国の精神などは少しもありません」とかの欠点は、「主権者が時代に依つて違ひ」など王朝交代の歴史的背景があり、同じく国民国家形成のプロセスによって克服する可能性がある課題だろうと、自分なりの思考を示している⁴⁸。その上、正田は「支那には現代に於ても人身売買その他色々野蛮なことがあります、とにかく支那に対しては、東洋の文化革命が集つて来てゐます。支那に起るべき変化を覚悟して、私どもは、支那と融合して行きたいものと思ひます」と呼びかけた⁴⁹。1919年の五・四運動と新文化運動、

1924年からの国民革命運動に伴う中国での社会変動を早い段階で察知し、相互理解の上で日中国国民同士の提携・協力（融合）を呼びかけた「賢者の声」と言えよう。

国民性とある程度の関連性のある話題では、日本人満洲移民の生活状況への観察がある。戸田が遼寧省金州にある日本人満洲移民の「愛川村」で見た状況では、関東庁管轄下の七戸の移民からなるこの村について、「彼らは関東庁に依つて極度に迄保護されてゐる——即ち機械による灌水は元より学校、警察、医者費用迄が官費である、それ故に今在る七軒の生活は大丈夫であるらしい、併し官費に依らず、彼ら自身で経営する事は思ひも依らない」。また、大連合資会社の移民部落の事情も似ていて、「彼らは毎年三百円乃至四百円の欠損続きである。何故なら彼らは自分達が作った物は一切喰はず、これらを売つてその代り米、味噌、砂糖、醤油等を買ひ入れる。その上に苦力を雇ふ費用の生活様式である」⁵⁰。つまり、植民地当局の「過保護」のもとで、日本人移民たちは現地生活への適応・融合どころか、自活することさえできない可能性があるという指摘である。

それと同じく、都市部の大連日本橋に位置する「連鎖街」では、植民地保護政策のもとで、「最初は殆ど日本人の商店のみだつたのが、最近どん——支那商人に喰込まれてゆく」、その理由はやはり「政府の絶大な保護を受けねば生活できぬやうな、結果に陥るのだ」⁵¹。当時の日本国内では、このような現象を、中国朝野の「排日」運動に起因すると宣伝されていたが、戸田は「之は何も排日現象ではなくて、日本人が生活の形に於て彼ら支那人に負けつゝあるのである」「支那人と日本人は何事にも努力が違ふ」⁵²と言ひ、主に移民政策・植民地施策の問題であると指摘した。

中国社会に対する正田と戸田の認識は、1920年代における知識人がかつて中国を「尊敬」から「蔑視」へと変化する思潮からの影響が伺える。

以上、史料に基づいて社会福祉学科の先輩である正田淑子及び戸田貞三が、戦前の中国と関わりを持ち、踏査や観察を通して政策的な視点から中国の社会問題を捉え、また、彼らが国家の植民地拡張政策に協力的な姿勢で中国に向けて活動を行ったことを大まかに明らかにした。このように人物の活動と歴史の実相を明らかにし、そこから今日にも有益な知見と反省の要素を見出し、今後の発展の糧にするのは重要な作業ではないかと思う。

一方、課題は幾つか残されている。今後、資料の発掘に力を注ぐ、より詳細な検討は、後日に期したい。

追記

1995年に私は一番ヶ瀬康子先生のご指導の下で、博士論文『「満洲国」社会事業史』の提出により、日本女子大学で社会福祉学の学位を取得し、日中社会福祉研究の第一歩に踏み出した。博論を執筆する過程において、かつて、社会福祉学科の先輩らが、中国とさまざまなつながりを持っていたことを知ることができた。いつかに時間があつたらこの史実について調べ、何かを書きたいこととずっと思っていたが、なかなか余裕がなく、定年退職を迎えることになった。いま、ラストチャンスだと、焦っていた気持ちの中で本稿を仕上げた。不備や事実誤認などいろいろあると思うが、皆さまのご叱正とご指摘を仰ぎたい。

本稿の執筆に資料を提供して下さった日本女子大学図書館の矢吹さより、ご助言を下された社会福祉学科の先輩の友友昌子にお礼を申し上げます。

注

- 1 「ほん女」は昔に日本女子大学に対する愛称である。
- 2 本学科教授

- 3 中嶋邦『『家庭週報』年表によせて』, 中嶋邦監修『女性ジャーナルの先駆け』, 日本女子大学教育文化振興桜楓会出版部, 2006年, p12, 17.
- 4 齋藤慶子・渡邊巧「成瀬仁蔵における「自学自動」の教育実践とその意義」, 『人間研究』第53号, 2017年 p42.
- 5 戦前の日本において「中国」の代わりに「支那」が多用されたが, 第一次資料の原型を残すため, 本論文は歴史用語としてそのまま引用することにする。「満洲」「満洲国」も同様.
- 6 朱琳「近代日本における知識人の中国認識——中国文学研究会を中心に——」p1 : p23
(東北大学博論) URL <http://hdl.handle.net/10097/00121763>
- 7 正田淑子の写真は, 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会『日本女子大学社会福祉学科五十年史』日本女子大学社会福祉学科, 1981年, p85.
- 8 桜楓会『家庭週報』, 昭和3年9月21日956号5面記事.
- 9 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会『日本女子大学社会福祉学科五十年史』日本女子大学社会福祉学科, 1981年, p2.
- 10 同上 p88
- 11 桜楓会『家庭週報』昭和8年5月5日1176号4面記事.
- 12 桜楓会『家庭週報』, 昭和8年5月5日1176号4面記事.
- 13 カソリン・ウエップ著, 正田淑子訳『英国婦人消費組合運動』, 同人社, 1932年 p2
- 14 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員帰朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第867号, 大正15年12月3日四面.
- 15 正田淑子「日支親善と我等の責任」1927年6月10日『朝日新聞』朝刊9面, 『聞蔵Ⅱビジュアル』より.
- 16 【リットン報告書】満州事変について国際連盟が派遣した調査委員会(リットン調査団)の報告書. 満州事変に対処するため, 連盟は1932年1月英国のリットン伯を団長に米・仏・独・伊各国委員計5名の調査団を編成. 2月の来日後, 3~4月中国, 4~6月満州を調査. 日本の軍事行動を侵略とする一方で満州での特殊権益を認め, 日中間の新条約締結を勧告する報告書を発表. しかし, すでに満州国を承認していた日本はこれを全く受けつけず, 連盟が1933年3月24日の総会で42対1(反対は日本のみ)で報告書を採択すると, 日本は同月27日連盟を脱退. (出典: 株式会社平凡社『百科事典マイペディア』電子版.
- 17 佐藤由利子・見城悌治「戦前期の留学生政策における日華学会と国際学友会の役割」, 『アジア教育』第14巻(2020年), p46.
- 18 同上, p48を参考.
- 19 「“満洲の母” 正田女史の談」, 『朝日新聞』1939年3月13日朝刊10面; 『聞蔵Ⅱビジュアル』より.
- 20 「“満人の慈母” 帰る 老軀に情熱を包んで」, 『朝日新聞』1939年2月21日朝刊11面; 『聞蔵Ⅱビジュアル』より.
- 21 同上.
- 22 「“満人の母” 激励・送別会」, 『朝日新聞』1939年3月11日朝刊11面; 『聞蔵Ⅱビジュアル』より.
- 23 「正田女史愈々渡満」『朝日新聞』1939年3月18日朝刊10面; 朝日新聞社『聞蔵Ⅱビジュアル』より.
- 24 「語る満州国の“母”, 正田女史おみやげ話」, 『朝日新聞』1940年7月20日朝刊7面; 『聞蔵Ⅱビジュアル』より.
- 25 王希亮『日本对中国東北的政治統治』, 黒龍江省人民出版社, 1991年, 203-205頁.
- 26 沈潔・魯岩「満洲国における女性政治団体の構成及び対抗」, 『高知女子大学紀要』第52巻, 2004年.
- 27 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会『日本女子大学社会福祉学科五十年史』, 日本女子大学社会福祉学科, 1981年, p68.
- 28 同上, 87頁.

- 29 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 30 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 31 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 32 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 33 正田淑子氏「支那見学のノートから」, 『家庭週報』第 860 号, 大正 15 年 10 月 8 日四面.
- 34 正田淑子氏「支那見学のノートから」, 『家庭週報』第 860 号, 大正 15 年 10 月 8 日四面.
- 35 正田淑子氏「(承前) 支那見学のノートから」, 『家庭週報』第 861 号, 大正 15 年 10 月 15 日六面.
- 36 正田淑子氏「(承前) 支那見学のノートから」, 『家庭週報』第 861 号, 大正 15 年 10 月 15 日六面.
- 37 正田淑子氏「(承前) 支那見学のノートから」, 『家庭週報』第 861 号, 大正 15 年 10 月 15 日六面.
- 38 正田淑子氏「(承前) 支那見学のノートから」, 『家庭週報』第 861 号, 大正 15 年 10 月 15 日六面.
- 39 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」, 『家庭週報』第 1130 号, 昭和 7 年 5 月 17 日三面. なお、「苦力」たちが豆粕板を運搬する写真は、『家庭週報』第 860 号, 大正 15 年 10 月 8 日四面に掲載されている. おそらく正田淑子が撮影したものである.
- 40 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」, 『家庭週報』第 1130 号, 昭和 7 年 5 月 17 日三面.
- 41 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 42 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 43 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 44 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員婦朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第 867 号, 大正 15 年 12 月 3 日四面.
- 45 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員婦朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第 867 号, 大正 15 年 12 月 3 日四面.
- 46 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員婦朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第 867 号, 大正 15 年 12 月 3 日四面.
- 47 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員婦朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第 867 号, 大正 15 年 12 月 3 日四面.
- 48 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員婦朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第 867 号, 大正 15 年 12 月 3 日四面.
- 49 正田淑子氏談「支那旅行の印象 桜楓会員婦朝者歓迎会にて」, 『家庭週報』第 867 号, 大正 15 年 12 月 3 日四面.
- 50 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 51 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.
- 52 「最近に視て来た満洲 戸田教授の満洲視察談を聞く」(二), 『家庭週報』第 1131 号, 昭和 7 年 6 月 3 日三面.

*本研究は科研費「日中間の社会事業政策移転のメカニズムに関する研究：1920～40年代を中心に」(令和 2 年～4 年課題番号 19K02224 研究代表者 沈潔)の助成を受けたものである。